

2020年度 国際日本文化研究センター共同研究会

<共同研究の目的>

国際日本文化研究センターが最も力を入れているのは、共同研究方式の日本文化研究です。日本文化を研究するためには、関係する個別専門分野ごとの成果が着実に積み重ねられなければなりません。と同時に、専門分野の枠組を越えて、研究者が相互に知見を高めあう場が必要になります。こうした共同研究の場は、総体として日本文化理解の促進に大きな役割を果たすものと考えます。このような観点から学際的な共同研究にウエイトを置いています。

また、日文研の共同研究では、日本と異なる知的伝統にたつ海外の研究者との交流をも重視します。異文化からの視点は研究に新しい展望と成果を与え、また研究のあり方に、よい意味での相対比をもたらします。さらに、国際化の時代を迎えた今日、日本文化研究もまた国際化をはかることで、時代の要請に応えることができるでしょう。

もちろん、日文研の共同研究は、単なる研究成果の交換にとどまるものではありません。専門分野及び知的伝統を異にする研究者たちが研究過程を共有しあうことによって生みだされる創造性、これこそが、日文研の共同研究がめざすところの眼目なのです。

(＊奨学生はオブザーバーでの参加となります)

応永・永享期文化論―「北山文化」「東山文化」という大衆的歴史観のはざまで―

<研究概要>

今、「室町文化」としてすぐに思い起こされるのは、足利義満が権勢をふるうなか、貴族文化・武家文化の融合、禅宗を始めとした大陸文化を受容したとされる所謂「北山文化」か、あるいは、義政治世から応仁の乱以後の時代、絵画・建築・庭園・文学・芸能・芸道など、日本文化の川上にあたるとも言うべき「東山文化」のどちらかではないだろうか。「北山文化」「東山文化」それぞれは、洛中の東西に所在する金閣・銀閣がアイコンとなって呼び起こすイメージによってますます確かなものとなり、それゆえに我々の「室町文化」観を膠着させてしまっている。

この共同研究は、これらの時代には生まれた応永から永享にわたるおよそ半世紀、義持・義教期に生じた種々の文化的事象について、歴史学・文学（文献学）・美術史学・思想史学といった複眼的視座・方法から全方位的に捉えることによって、この時代を日本文化史・室町文化史に明確に位置づけようとするものである。

<研究代表者>

大橋 直義 国際日本文化研究センター客員准教授

呉座 勇一 国際日本文化研究センター助教

<本年度研究会開催予定>

4回

近代東アジア文化史の再構築 I —19 世紀の百年間を中心に

<研究概要>

従来、19 世紀以降のナショナリズムの影響のもとで、われわれのいわゆる文学史や文化史、いずれも一国を単位とし、外部、ないしは他者と切り離して構築してきた。日本文学史・文化史、中国文学史・文化史などがそれである。しかし、これは、文学や文化自身の成立原理に反するのみならず、真の歴史的事実とも異なっている。

周知のとおり、日、中、韓、越の東アジア四ヶ国の文学や文化は、古代、近代を問わず、つねに互いに影響し、互いに交錯して、緊密に連動している。古代では、漢字や漢文、また儒教や仏教などがその基盤を構成し、そして近代では、いわゆる西力東漸、西学東漸という時代の流れの中で、東アジア四ヶ国は、さらに交互に経験を参照し、交互に支え合う形でそれぞれの文化的転換を模索しつつ、一つの全体のもとで、相次ぎ西洋文化、西洋文明のインパクトを受け入れてきた。したがって、この 200 年の東アジアの文学や文化の生成と発展からすれば、それを安易に各国の一国内史に切り分けては、けっしてその間の真の歴史過程を再現することができない。

このような事情に基づき、本共同研究会では、近代日中の文学、文化交流を中心に、その相互に影響し、交錯するさまざまな歴史的事例の発掘と考察を通して、従来の一国史的な歴史叙述の脱構築ないしは止揚を目指すべく、既成の歴史記述とは異なる視点や方法を提示し、当該地域全体の文学や文化の歴史をあらためて構築してみたい。

<研究代表者>

劉 建輝 国際日本文化研究センター教授

<本年度研究会開催予定>

5 回

文明としてのスポーツ／文化としてのスポーツ

<研究概要>

スポーツには国や地域独自の文化を背景に発展・進化を遂げてしていったもの、そして他国・他地域との接触によりもたらされたもの、があると考えられる。幕末の開国以降西洋列強との接触により日本へ伝播した西洋起源のスポーツの背景には、ボクシングのようにルール設定により野蛮との訣別を図った、すなわち文明の一要素となることを企図したものがあつた。また、日本で生まれたスポーツにも柔道から **JUDO** への展開---あるいは進化---のように異文化との接触により変貌を遂げていった類もある。一方には野蛮と対置される文明としてのスポーツ、そして他方には一国のなかで文化として展開したのち異種文化と遭遇しそれを契機に変化していった---あるいは変化を生まなかった、拒んだ---スポーツ、を考えることができよう。本共同研究は、この2種のスポーツを念頭におきながら近代日本の歴史のうえでのスポーツに関わるさまざまな事例を検討し、日本文化の従前の解釈に新たな視角を提示することをも目指すこととしたい。

<研究代表者>

牛村 圭 国際日本文化研究センター教授

<本年度研究会開催予定>

4回

身体イメージの想像と展開—医療・美術・民間信仰の狭間で

<研究概要>

本研究では近世から近代、現代に至るまで、人々が身体イメージをどのように想像して図像化し、また展開させてきたのかを明らかにしていく。研究の独自性は、①人文社会学と自然科学との融合的研究である点、②図像、造形物、儀礼、芸能など幅広い素材を対象とする点、③身体各部位のイメージを分析した後、身体各部位の序列化、そして身体全体のイメージを解明し、段階的に議論を進めていく点、④ジェンダーの視点を取り入れ、新たな視座を提示する点にある。日本の医学に影響を与えた東洋医学、西洋医学のみならず、人類学の研究成果も取り入れ、民間医療における身体イメージも視野に入れる。最終的には、身体の異常や奇形に対する偏見、進展を続ける生殖医療技術や生命倫理の議論に関連させて、現代社会を再検討するための素材を提供したい。

<研究代表者>

安井 眞奈美 国際日本文化研究センター教授
ローレンス・マルソー 国際日本文化研究センター共同研究員

<本年度研究会開催予定>

4回

巫俗と占術の現在—東アジア世界の民俗信仰の伝播と展開

<研究概要>

巫術や占術は〈カミ・霊の意志を読み取る行為〉が重要な位置を占め、そこにさまざまな〈祈り〉が付随する。その東アジア諸地域における巫術や占術に関わる信仰の民俗的展開・宗教現象の諸相を、文化・歴史的背景と関わらせながら考察していく。

この研究会では、巫俗は従来の文化人類学・民俗学でのフィールド・ワークを土台とした研究に限定せず、御霊信仰（北野・祇園社など）、陰陽道、暦、夢、街作りにおける防疫術、祭祀、呪術などの民間信仰を含む。また、占術は、古占書、現代の占い、占の歴史などを扱うこととする。つまり従来の枠に捕らわれず託宣・予言・治病・祭儀など人びとの「祈り」を含む民間信仰を幅広く扱う。

地域は日本のみならず中国、朝鮮半島、台湾といった東アジア、時代は古代から現代までを研究の対象とする。

<研究代表者>

吉村 美香 国際日本文化研究センター客員准教授
榎本 渉 国際日本文化研究センター准教授

<本年度研究会開催予定>

4回

縮小社会の文化創造：個・ネットワーク・資本・制度の観点から

<研究概要>

日本の人口は2008年から急速な減少に転じた。高齢化率が高くなり、家計の可処分所得は2015年には30年前の水準に戻り、豊かさを感じていない国民が増えているといわれている。そうしたなかで、富裕と貧困、東京と地方、本土と沖縄、「日本人」とそれ以外、高齢者と若者、健常者と障害者、性的多数者と少数者、グローバル・エリートとローカルな民など、社会のさまざまな分断があらわれている。

そのような時代に、文化はどのようなものになるのだろうか。現代の日本で新たな思想や価値につながる何か芽生えているのか。制度や社会的な圧力によって生まれなかったものがありはしないか。社会福祉や地域振興と文化創造は、ときに矛盾をはらみながら展開するが、はたしてそれらは個の「生」とどう関わっているのか。

個人の「生」の表現とそれに関する制度、政策、規制、資本主義の関係、参照点としての異文化圏、そして理論と批評の行方についてなどを検討することを通して、縮小社会における文化創造の現状認識を可視化したい。

<研究代表者>

山田 奨治 国際日本文化研究センター教授

<本年度研究会開催予定>

4回

戦後日本の傷跡

<研究概要>

本共同研究では戦後日本を〈傷跡〉というキーワードから再検討する。傷跡とは過ぎ去った過去の時間に生じた出来事（傷）を再確認するための記号であるばかりではない。それはいまだ終わらない、完結しない過去、癒やしがたく忘却することのできない経験が現在に息づく、現在進行形の語りによってしか語ることの出来ない、過去の時間と現在の時間の交錯する場所だ。傷跡はまだ固まる前のかさぶたのように、現在の暴力によって剥がされ、剥き出しになり、新たな傷として再生することもあるだろう。戦後日本をそのように無数の傷跡が無数の新たな傷として更新されてしまう時空間として捉えることが出来ないだろうか。文学や芸術において表象された傷跡、様々な民衆運動の闘いとその挫折の中に見られる傷跡、医療や健康政策の中で管理される身体と個人の生死など、戦争経験の傷跡を生き続けなければならなかったアジアと日本の戦後社会の多様な問題について議論する。

<研究代表者>

坪井 秀人 国際日本文化研究センター教授

宇野田 尚哉 国際日本文化研究センター共同研究員

<本年度研究会開催予定>

4回

貴族とは何か、武士とは何か

<研究概要>

日本は中国や朝鮮諸国とは異なり、武家政権が現われ、七百年近くも存続した。このことの持つ意味は、単に日本の前近代史の分野だけに留まるものではない。

まずは中近世の「武士」の貴族的要素、武家と貴族との融合について、日本中世史・近世史研究の立場から、実証的に考察していく。

そして、何故に日本において武士が発生し、それが政治・経済・社会、そして文化の局面において重要な存在となり、そして貴族政権に組み込まれ、さらには政権を担う存在となったかという問題について、古代史・中世史の視点から解明する。

暴力団的性格や穢としての存在、また貴族志向の強さ、芸術的側面などを持った武士が、歴史の重要な構成要素となる分岐点がどこにあるのか、そしてそれはどのような契機や過程によるものなのか、それは日本という国を理解するための最重要な課題なのである。

さらにアジア史の中の日本歴史の普遍性と特殊性について、国際的に解明する。

<研究代表者>

倉本 一宏 国際日本文化研究センター教授

<本年度研究会開催予定>

4回